

大久保晴功

西穂高には、失った青春が甦る感じで、二度と登らないと思っていました。あれから、42年が過ぎサラリーマン人生も残りわずか、子供たちも社会人となり2人とも家をはなれて行き、定年後の人生を悩む日々となりました。

そんな中、2年前の事故の40周年忌の時に、腰原、立石、今井君に誘われて7月下旬でしたが、追悼登山をして屈折気味の思いを少し晴らしてきました。この時は、事故の時ほどではなかったのですが、独標は雨と霧の中でした。そこで、再び晴天の西穂へ行きたいという気持ちが芽生えました。

そして、今年の8月1日は土曜日で、深志の追悼登山との合流できることもあり、晴天を期待して、腰原君と私の山仲間の2人と登ることにしました。調布に8時に集合して、車で新穂高温泉へ。ロープウェイ経由で西穂山荘へ。翌日の8月1日に腰原君とは西穂高山頂まで登り、帰りに独標で深志の追悼登山の方々と合流しました。

今年も独標は雨と霧の中に黒く不気味にそびえていました。

独標では、松本からの参加メンバーが次々と登ってくるのを見て感動しました。その後、お花畑で雨中の50名以上と多く仲間と追悼式に初めて参加しました。事故の生き残りとして個人的には、喪失感と虚無感を心のどこかに抱き続けてますが、もっと広い世界で追悼式を毎年開催している関係者。

さらに毎年、独標に登っているという小林先生の姿など印象に残っています。7月31日の夜は、前泊の方々、初めて会った方も多かったのですが深志OBといったことで仲間に入れてもらい、ビールなど飲みながら42年の過ぎ去った日々を想うとともに、もっと前向きに追悼登山に参加できるのだと思いながら、翌日、雨の降り続く山をあとにしました。

今年も天候には恵まれず、晴天の西穂高に登るという課題が残りました。

太田知博

西穂に登りたかった。42年前に登る予定だったが登りそこなった山に、帰らない人となった11人の仲間が踏みしめた登山路を辿って見たかった。

今回同窓の仲間と追悼登山を行うというプランに便乗することができ、ツアーに参加するような気持ちで参加して、無事登ってくることができました。このような機会を提供してくれた人達に感謝いたします。幹事さんどうもありがとうございました。

ひとつ残念なことがあります。独標の事故以来深志では集団登山を行っていないように聞いています。私はこのことを大変残念に思います。希望者には山の素晴らしさを体験させてあげる機会を、是非設けていただきたいと思います。